

税務署長の冒険

宮沢賢治

青空文庫

一、濁密防止講演会

〔冒頭原稿数枚なし〕

イギリスの大学の試験では牛オックスでさへ酒を吞のませると目方が増すと云いひます。又これは実に人間エネルギーの根元です。酒は圧縮せる液体のパンと云ふのは実に名言です。堀部安兵衛が高田の馬場で三十人の仇討あだうちさへ出来たのも実に酒の為にエネルギーが沢山あつたからです。みなさん、国家のため世界のため大に酒を吞んで下さい。」（小学校長が青くなつてゐる。役場から云はれて仕方なく学校を貸したのだが何が何でもこれではあんまりだと思つてすっかり青くなつたな）と税務署長は思ひました。けれどもそれは大ちがひで小学校長の青く見えたのはあんまりほめられて一そう酒が吞みたくなつたのでした。なぜならこの校長さんは樽たるこ先生といふあだ名で一ぺんに一升ぐらゐは何でもなかつたのです。みんなはもちろん大賛成でうまいぞ、えらいぞ、と手をたゝいてほめたのでした。税務署長がまた見掛けの太つたざつくばらんらしい男でいかにも正直らしくみんなが怒るかも知れないなんといふことは気にもとめずどんどん云ひたいことを云ひました。実際それはひ

どい悪口もあつてどうしてもみんなひどく怒らなければならぬ筈なのにも係はずみんなはほんたうに面白さうに何べんも何べんも手を叩いたり笑ったりして聞いてゐました。そのはじめの方をちぐめて見ますとこんな工合です。

「濁密をやるにしてもさ、あんまり下手なことはやってもらひたくないな。なあんだ、味噌桶の中に、醪を仕込んで上に板をのせて味噌を塗つて置く、ステッキでつつついで見るとすぐ板が出るぢやないか。厩の枯草の中にかくして置く、いゝ馬だなあ、乳もしぼれるかいと云ふと顔いろを変へてゐる。」

新しい肥樽の中に仕込んで林の萱の中に置く。誰かにこつそり持つて行かれても大声で怒られない。煤だらけの天井裏にこさへて置いて取つて帰つて来るときは眼をまつ赤にしてゐる。

できあがつた酒だつて見られたぎまぢやない。どうせにぎり酒だから濁つてゐるのはいゝとして酸っぱいのもある、甘いのもある、アイヌや生蕃にやつてもまあご免蒙りませうといふやうなのだ。そんなものはこの電燈時代の進歩した人類が呑むべきもんぢやない。どうせやるならなぜもう少し大仕掛けに設備を整へて共同でもやらないか。すべからく米も電気で研ぐべし、しぼるときには水圧機を使ふべし、乳酸菌を利用し、ピペット、ピ

「カー、ビュレット立派な化学の試験器械を使つて清潔に上等の酒をつくらないか。もつともその時は税金は出して貰もらひたい。さう云ふふうにやるならばわれわれは実に歓迎する。技師やなんかの世話までして上げてもら。こそこそ半分かうじのまゝの酒を三升つくつて罰金を百円とられるよりは大びらでいゝ酒を七斗呑めよ。」

「まだまだずるぶんひどく悪にくまれ口もきゝ耳の痛い筈なやうなことも云ひましたが誰も気持ち悪くする人はなく話が進めば進むほど、いよいよみんな愉快さうに顔を熱ほてらして笑つたり手を叩たたいたりしました。」

「どうもをかしいどうもをかしい、どうもをかしいとみんなの顔つきをきよろきよろ見ながらその割合ざつくばらんの少しずるい税務署長が思ひました。税務署長の考ではうんと悪口を云つてどれ位赤くなつて怒る人があるかを見て大体その村の濁密の数を勘定しようと思ふのでした。それがいけないやうでしたから今度はだんだんおどしにかゝつて青くなる人を見てやらうと思ひました。」

ところがやつぱり面白さうに笑ひます。

税務署長は気が気でなく卒倒しさうになつて頭に手をあげました。

全体こんなにおれの悪口をよろこんで笑ふのはみんなが一人も密造をしてゐないのか、

それともおれの心底がわかつてゐるのか、どうも気味が悪い、よしもう一つだけ山をかけて見ようと思つて最後にコップの水を一口のんでできる丈だけ落ち着いて斯かう云ひました。

「正直を云ふとみんながどんなにこつそり濁密をやつた所でおれの方ではちやんとわかかつてゐる。この会衆の中にも七人のおれの方への密告者がまじつてゐるのだ。」

みんなはしいんとなりました。それからザアツと鳴りました。さあ、こゝだおれを撲なぐりにかゝるやつがあるぞ、遁にげみちはちやんときまつてゐる、あしたの午ひるころみんな仕事に出たころ係二十人一齐に自転車をやつて来てそいつを押へしまふ、斯う考へて税務署長はシラトリキキチに眼くばせして次を云ひました。

「おれの方では誰たれの家の納屋の中に何斗あるか誰の家の床下に何升あるかちやんと表になつてゐるのだ。」するとどうです、いまあれほど気が立つたみんなが一齐に面白さうにとつと吹き出したのです。もうだめだ、おしまひだ、しくじつたと署長は思ひました。そしてもうすっかりぐるぐるして壇を下りてしまひました。

二、税務署長歓迎会

税務署長が壇を下りましたらすぐ名誉村長が笑ひながら少しかぐんで署長の前にやつて来ました。そして礼を云ひました。

「たゞ今は実に有益なご講演を寔に感謝いたします。何もございませぬがいさゝか歓迎のしるしまで一献さしあげたいと存じます。ご迷惑は重々でございませうがどうかぢきそこまで御光来を願ひたう存じます。」

税務署長はいよいよ卒倒しさうになつて

「いや、それはよろしい。」とかすれた声で返事しました。「では、」村長はみんなの方に向いて

「今晚の講演会はこれで閉会といたします。」と云つてから又署長たちの方に向き直つて「さあ、ではどうぞ。」と右手で玄関の方を指しました。署長はなんとも変な気がしましたが仕方なくシラトリ属と一緒に村長たちに案内されて小学校の玄関を出すぐ一町ばかりさきの村会議員の家に行きました。村会議員の家は立派なもので五十畳の広間にはあかりがぞろつともり正面には銀屏風ぎんびやうぶが立つてそこに二人は座らされました。すぐ村の有志たちが三十人ばかりきちんと座りました。たちまち立派な膳ぜんがならびたしかに税金を納めてある透明な黄いろないゝ酒が座をまはりはじめました。

みんなが交る交る税務署長のところへ盃さかづきを持ってやって来ました。

「いや、本日はお疲れでございませう。失礼ながら献けん盃はい致しまする。」

「や、ありがたう、どうも悪口を云つて済まなかつた。どうも悪にくまれ商売でね、いやになるよ。」

「どう致しまして。閣下のやうな献身けんしんのお方ばかりでしたら実に国家も大発展です。さあどうぞ。」

「はっはっは、いや、ありがたう。」なんて云ふぐあひ工合くあひでシラトリキキチ氏の云つたやうにだんだんみんなの心は融とけて来たやうに見えましたが実は税務署長は決して油断をしないで絶えず左右に眼を配つてゐました。そのうちにいよいよみんなは酔つてしまつてだんだん本音を吹いて来ました。

「や、署長さん。一杯いかゞ、どうです。ワツハツハ。濁り酒、味噌みそ桶けに作るといふのはあんまり旧式だな。もつと最新法の方はいゝな。おい、署長さん。さあ、一杯いかゞ、私の盃をあなた取りませんか。閣下あ、ハツハツハ。さあ一杯、」

「いや、わかつた、わかつた。いや、今晚は実めいに酩めい酩めいしいした。辱かたじけない。」

「ワツハツハ。やあ、今度はシラトリさん、さあ、おやりなさい。男子はすべからく決然

たるところがなくてはだめですよ。さあ、高田の馬場で堀部安兵衛金丸が三十人を切ったのは実際酒の力だ、面白い、牛も酒を呑むと酔ふといふのは面白い。さあ一杯。なかなかあなたは酒が強い。さあ一杯。」

一人が行ったと思ふと又一人が来るのでした。

「署長さん。はじめてお目通りを致します。」

「いやはじめて。」

「はじめて、はてなさつきも来ましたかな、二度目だ、ハツハツハ。署長さん、いや献杯、つゝしんで献杯つかまつ仕ります。ハツハツハこの村の濁り酒はもう手に取るやうにわかつてゐる、本当にか、さあ、本当ならいつでもやつて来い。来るか、畜生、来て見やがれ。アツハツハ、失礼、署長さん署長さん、もう斯かうなつたらいつそのこと無礼講にしませう。無礼講。おゝい、みんな無礼講だぞ、そもそもだ、濁密の害悪は国家も保証する、税務署も保証すると、ううい。献杯、いや献杯、」

「もう沢山、」

「遁にげるのか、遁げる気か。ようし、ようし、その気なら許さんぞ。献杯、さあ献杯だ、おゝい貴様あ。」

税務署長はもうすっかり酔つてゐました。シラトリ属も酔つてはゐました。けれども二人とも決して職業も忘れず又油断もしなかつたのです。

それでももうぐたぐたになつて何もかもわからないといふふりをしてゐました。それにくらべたら村の方の人たちこそ却つて本當に酔つてしまつたのでした。そのうちに税務署長は少し酒の匂にほひが變つて来たのに気がつきました。たしかに今までの酒とはちがつた酒が座をまはりはじめてゐました。署長は見ないふりをしながらよく気をつけて盃さかづきを見ました。が少しも濁つてはゐませんでした。どうもをかしい。これは決してこゝらのどの酒屋でできる酒でもない、他県から来るのだつてもう大ていはきまつてゐる。どうもをかしいと斯かう署長はひとりで考へました。そのうちさつきとこころの村会議員が又やつて来てきちんと座つて云ひました。

「いや、もう閣下、ひどくご無礼をいたしました。こんな乱雑な席にご光来をねがひまして面目次第もございません。たゞもうほんの村民の志だけをお汲くみ下されまして至らぬところ又すぎました処とこころは平にご容赦をねがひます。」

署長はすっかり酔つた風をしながら笑つて答へました。

「いや、君、こんな愉快なうちとけた宴会ははじめてだよ。こんなことならたびたびやつ

て来たいもんだね。斯う出られたら困るだらう。」

村会議員はちらつと署長を見あげました。本当はまだ酔つてゐないなと気がついたので、署長が又云ひました。

「どうも斯う高い税金のかかった酒を斯う多分に貰もらつちやお気の毒だ。一つ内密でこの村だけ無税にしようかな。」

「いや、ハツハツハ。ご冗談。」村会議員は少しあわてて台所の方へ引つ込んで行きまし
た。

「もう失礼しよう、おい君。」署長は立ちあがりました。

「もうお帰りですか。まあまあ。」村長やみんなが立つて留めようとしたときそこはもう
商売で署長と白鳥属とはまるで忍術のやうに座敷から姿を消し台所にあつた靴くつをつまんだ
と思ふともう二人の自転車は暗い田圃たんぼみちをときどき懐中電燈をばつぱつとさせて一目散
にハーナムキヤの町の方へ走つてゐたのです。

三、署長室の策戦

次の日税務署長は役所へ出て自分の室へやに入り出勤簿を検査しますとチリンチリンと卓上ベルを鳴らして給仕を呼び「デンドウイを呼べ。」とあごで云ひつけました。

すぐ白服のデンドウイ属がいかに敬けいけん虔に入つて来ました。

「まあ掛け給たまへ。」署長はやさしく云つて話の口をきりました。

「ユグチュユモトの村へ出張して呉くれ給へ。」

「は、」

「変装して行つて貰もらひたいな。一寸ちよつと売薬商人がいゝだらう。あの千金丹の洋かうもり傘がさがあつた筈はずだね。」

「は、ごぞいます。」

「ぢや、ライオン堂へ行つてこれでウヰスキーを一本買つてねそれから広告をくばつてやるからと云つて何かのちらしを二百枚も貰ひたまへ。そいつを持って入つて行くんだ。君の顔は誰たれも知つてやしない。どうもあの村はわからないところがある。どうも誰かがどこかで一斗や二斗でなしにつくつてゐる。一つ豪胆にうまくやつて呉れ給へ。」

「は、畏かしこまりました。」

デンドウイ属はもう胸がわくわくしました。うまく見付けて帰つて来よう。そしたら月

給だつてもうきつと三円はあがる、ひとつまるつきり探偵風にやってやらう。

「概算旅費を受け取つて行きたまへ。」署長はまた云ひました。

「ありがたいございます。」デンドウイ属は礼をして自分の席へ歸つてそれから会計へ行つて七日間の概算旅費を受け取つて自分の下宿へ歸つて行きました。

さて八日目の朝署長が役所へ出て出勤簿を検査してそれから机の上へ両手を重ねてふうと一つ息をしたとき扉が^とかたつと開いてデンドウイ属があの日前の白服のまゝでまた入つて来ました。どうもその顔がひどくやつれて見えました。署長は思はず椅子^{いす}をかたつと云はせました。

「どうだつたね、少しはわかりましたか。」心配さうにそれにまたにこにこしながら訊いたのです。

「どうもいけませんでした。あの村には濁密はないやうであります。」

「さうですか。どう云ふやうにしてしらべました。」署長は少しこはい顔をしました。

「ニタナイのところに丁度老人でなくなつた人があつたのです。人が集つたらいづれ酒を呑まないのであるからと存じましてすぐその前のうちへ無理に一晩泊めて貰ひました。するとそのうちからみんな手伝ひに参りまして道具やなんかも貸したのでございます。私は二

階からじつと隣りの人たちの云ふことを一晚寝ないで聞いて居りました。すると夜中すぎに酒が出ました。もう一語でもきゝもらすまいと思つてゐましたら、そのうち一人がすうと口をまげて齒へ風を入れたやうな音がしました。これはもうどうしても濁り酒でないと思つてゐましたら、」

「ふんふん、なかなか君の觀察は鋭い。それから。」

「そしたら一人が斯う云ひました。いゝ、ほんとにいゝ、これではもうイーハトヴの友もなにも及ばないな。と云ひました。イーハトヴの友も及ばないとしますととても密造酒ではないと存じました。」

「その酒の名前を聞きましたか。」

「私は北の輝てるだらうと思ひます。」

署長は俄にはかにこはい顔をしました。

「いゝや、北の輝てるぢやない。断じてさうでない。そのいゝ酒がどこから出来てゐるかどの県から入つてゐるかそれをよくしらべに君をたのんだのだ。けれどもそしてそれからあと七日君はいつたい何をして居たのだ。」

「それからあとは毎日林の中や谷をあるいて山地密造酒を探して居りました。」

「あつたか。」

「ありませんでした。」

「見給へ。そんな藪やぶの中にこつそり作るやうなそんなのぢやない。どこか床下をほるかなんかしても少し大きくやつてゐるだらうとはじめから僕が注意して置いたぢやないか。」

デンドウイ属はもう頭を垂れてしまひました。そのやつれた青い顔を見ると署長もまた少し気の毒になつて来ました。

「いや、よろしい。帰つてやすみ給へ。ご苦労でした。シラトリ君に一寸ちよつと来いと云つて呉れ給へ。」

デンドウイ属はしほしほ出て行きました。間もなく、例のシラトリ属がすまし込んで入つて来ました。

「君、ユグチュユモトへ行つてくれ給へ。却かへつてそのまゝの方がいゝ。あのね、この前の村会議員のところへ行つてね、僕からと云ふ口上でね、先せんころはごちそうをいたゞいて実にありがたう、と、ね、その節席上で戯談じやうだん半分酒造会社設立のことをおはなしたところ何だか大分本気らしいご挨拶あいさつがあつたとね、で一つこの際こちらから技術員も出すから模範的なその造酒工場をその村ではじめてはどうだらう、原料も丁度そちらのは醸造に

適してゐると思ふと斯う吹つかけて見てじつと顔いろを見て呉れ給へ。きつと向ふが資本がありませんと斯う云ふからね、そしたらどうでせう、半官半民風にやらうぢやありませんかと斯うやって呉れ給へ。そしてその返事をもうせき一つまでよく覚え込んで帰って呉れ給へ。いますぐです。今日中に帰れるだらう、あしたは休んでもいゝから。」

「帰れます。」シラトリキキチ氏はしやんと礼をして出て行きました。署長はもう一生けん命何かを考へ込んで昼飯さへ忘れる風でした。ひるすぎはそはそは窓に立ってシラトリ属の帰るのをいまかいまかと待つてゐました。

ところがシラトリ属は夕方になつても帰りませんでした。

署長はもうみんなも帰る時分だしと思つて自分も一ぺん家へ帰るふりをして町をぐるつとまはりみんなが戻つたころまた役所へ来て小使に自分の室へ電燈をつけさせて待つてゐました。すると八時過ぎて玄関でがたつと自転車を置いた音がしてそれからシラトリ属がまるで息を切らして帰つて来たのです。

「どうだった。」署長は待ち兼ねてさう訊ねました。

「だめです。」

「いけなかつたか。」署長はがっかりしました。

「仰つたおつしや

とほり云つてだまつて向ふの顔いろを見てゐたのですけれどもまるで反応がありません、さあ、まあそんなことも仰つしやつておいででしたがどうもお役人方の仰つしやることはご無理もあればむづかしいことも多くてなんててんどり合はないのです。」

「顔色を変へなかつたか。」

「少しも変わりませんでした。」

「それからどうした。」

「仕方ありませんからそこを出て村の居酒屋へいきなり乗り込んであつた位の酒を瓶詰びんづめのものばかり売のも全部片つぱしから検査しました。」

「うんうん。そしたら。」

「そしたら瓶詰はみんなイーハトヴの友でしたしはかり売のはたしかに北の輝てるです。」

「北の輝の方がいくらか廉やすいんだな。」

「さうです。」

「たしかに北の輝かね。」

「さうです。それから酒屋の主人に帳簿を出さしてしらべて見ましたが酒の売れ高がこのごろ毎年減つて行くやうであります。」

「をかしいな。前にはあの村はみんな濁り酒ばかり呑んでゐたのにこのごろ検拳が厳しくてだんだん密造が減るならば清酒の売れ高はいくらかづつ増さなければいけない。」

「けれどもどうも前ぐらゐは誰も酒を呑まないやうであります。」

「さうかね。」

「それに酒屋の主人のはなしでは近頃は道路もよくなつたし荷馬車も通るのでどこの家でもみんな町から直かに買ふからこつちはだんだん商売がすたれると云ひました。」

「をかしいぞ。そんなに町からどしどし買つて行くくらゐの現金があつた村にある筈はない。どうもをかしい。よろしい。こんどは私が行つて見よう。どうもをかしい。明日から三四

日留守するからね。あとをよく気をつけて呉れ給へ。さあ帰つてやすみ給へ。」

税務署長は唇に指をあて、眼を交に光らせて考へ込みながらそろそろ帰り支度をしました。

四、署長の探偵

税務署長のその晩の下宿での仕度ときたら實際科学的なもんだつた。

まづ第一にひげをはさみでぢやきぢやき刈りとして次に揮発油へ木タールを少しまぜて茶いろな液体をつくつて顔から首すぢいっぱいに手にも塗った。鼻の横や耳の下には殊に濃く塗つたのだ。それからアスファルトの屋根材の継目に塗りつける黒いペイントを顎の^{あご}ところへ大きな点につけてしばらくの間じつとそんな油や何かの乾くのを待つたが、それがきれいに乾くとこんどは鏡台の引出しをあけてにせものの金歯を二枚出して犬歯へはめました。すると税務署長がすっかり變つてしまつて請負師か何かの大將のやうに見えて来た。それから署長は押し入れからふだん魚釣りに行くときにつかふ古いきゆうくつな上着を出して着ておまけに乗馬ズボンと長靴^{ながぐつ}をはいた。そして葉書入れを逆まにしてしばらく古い名刺をしらべてゐたがその中からトケウ乾物商サヘタコキチと書いたやつをえらんでうちかくしへ入れた。独りものの署長のことだから實際こんなことができたのだ。それから帽子をかぶり^{かうもりがさ}洋傘^{かさ}を持つて外へ出たけれども何と思つたかもう一ぺん長靴をぬいでそれを持つて座敷へあがつた。古い新聞紙を鏡の前の畳へ敷いて又長靴をはいてちゃんと立つて鏡をのぞいてさあもうにかにかにかにかし出した。

それから俄かに^{には}まじめになつてしばらく顔をくしゃくしゃにしてゐたがいよいよ勇氣に充ちて来たらしく一ぺんに畳をはね越えておもてに飛び出し^{おほまた}大股^{おほまた}に通りをまがつた。実

にその晩の夜の十時すぎに勇敢な献身的なこの署長は町の安宿へ行つて一晚とめて呉れと云つた。そしたらまじめにお湯はどうかとか夕飯はいらぬかとか宿屋では聞いた。署長はもうすっかり占めたと思つたのだ。そして次の朝早く署長はユグチュユモトの村へ向つた。

村の入口に来てさつそく署長はあの小売酒屋へ行つた。

「えゝ伺ひますが、この村の椎^{しひたけ}蕈山はどちらでせうか。」

「椎蕈山かね。おまへさんは買付けに来たのかい。」

「へえ、さうです。」

「そんなら組合へ行つたらいいだらう。」

「組合はどちらでございませう。」

「こつから十町ばかりこのみちをまつすぐに行くとなね学校がある。」

知つてるとも、そこでおれが講演までしてひどい目にあつてぢやないか、署長は腹の底で思つた。

「その学校の向ひに産業組合事務所つて看板がかけてあるからそこへ行つて談^{はな}したらいいだらう。」

「さうですか。どうもありがとうございました。お蔭かげさまでございます。」署長はまるで飛ぶやうにおもてに出てまた戻つて来た。

「どうもせいぎきれでいけない。一杯くれませんか。え、瓶びんでない方。ううい。い、酒です。何て云ひます。」

「北の輝てるです。」

「これはいゝ酒だ。こゝへ来てこんな酒を吞のまうと思はなかつた。どこで売ります。」

「私のところでおろししますよ。」

「はあ、しかし町で買った方が安いでせう。」

「さうでもありません。」

「だめだ。持つて行くにひどいから。」

署長は金を十銭おいて又飛び出した。それから組合の事務所へ行った。さあもうつかまへるぞ今日中につかまへるぞ、署長はひとりで思った。ところが事務所にはたった一人髪をてかてか分けて白いしごきをだらりとした若者が椅子いすに座つて何か書いてゐた。こいつはうまいと署長は思った。

「今日は、いゝお天気でございます。ごめん下さい。私はトケイから参りました斯かう云ふ

ものでございますがどうかお取次をねがひます。」署長はあの古い名刺をだいぶ黄いろになつてゐるぞと思ひながら出した。若者は率直に立つて「あゝさうすか。」と云つて名刺を受けとつたがあとは何も云はないでもぢもぢしてゐた。

「今朝はまだどなたもお見えにならないんですか。」

「はあ、見えないで。」若者は当惑したやうに答へた。

「えゝ、ではお待ちいたします、どうかお構ひなく。いかゞでございませう。本年は^{しひた}蕈^けの方は。この雨でだいぶ豊作でございませうね。」

「あんまりよくないさうだよ。」

「はあいや^{にほひ}匂^ひやかなにかは悪いでせうが生えることは沢山生えましてございませうね。」

「できたらう。」若者はだんだん^{ことば}言も粗末になつて来た。

「どうでせうね。わたしあ東京の乾物屋なんだが貸しの代りに酒をたくさんとつたのがあ
るんだがどうでせう。椎蕈ととり代へるのを承知下さらないでせうかね。安くしますが。」

「さあだめだらう。酒はこつちにもあるんだから。」

「町から買ふんでせう。」

「いゝや」

「どこかに酒屋があるんですか。」

「酒屋ってわけぢやない。」

「さあ署長はどきつとしました。」

「どこですか。」

「どこって、組合とはまた別だからね。」若者はびたつと口をつぐんでしまひました。さあ税務署長はまるで踊りあがるやうな気がした。もうたゞ一息だ。少くとも月一石づつづつあちこちへ四五升づつ売つてゐるやつがある。今日中にはきつとつかまへてしまふぞ。

「椎蕈山は遠いんですか。」

「一里あるよ。」

「このみちを行つていゝんですか。」

「行けるよ。」

「それでは私山の方へ行つて見ますからね、向ふにも係りの方がおいでせう。」

「居るよ。」

「ではさうしませう。こつちでいつまでも待つてるよりはどうせ行かなければいけないんだ

から。ではお邪魔さまでした、いまにまた伺ひます。」

署長は小さな組合の小屋を出た。少し行つたらみちが二つにわかれた。署長はちよつと迷つたけれども向ふから十五ばかりになる子供が草をしょつて来るのを見て待つてゐて訊いた。

「おい、椎葦山しひたけへはどう行くね。」

すると子供はよく聞えないらしく顔をかしげて眼を片つ方つぶつて云つた。

「どこね、会社へかね。」会社、さあ大変だと署長は思った。

「あゝ会社だよ。会社は椎葦山とは近いんだらう。」

「ちがふよ。椎葦山こつちだし会社ならこつちだ。」

「会社まで何里あるね。」

「一里だよ。」

「どうだらう。会社から毎日荷馬車の便りがあるだらうか。」

「三日に一度ぐらゐだよ。」

ふん、その会社は木材の会社でもなけあさくさん醋酸の会社でもない、途方もないことをしてやがる、行つてつかまへてしまふと署長はもうどぎどぎして眼がくらむやうにさへ思った。

そして子供はまた重い荷をしょって行ってしまった。署長はまるで始めて汽車に乗る小学校の子供のやうに勇んでみちを進んで行った。それから丁度半里ばかり行ったらもう山になった。みちは谷に沿った細かいきれいな台地を進んで行ったがまだ荷馬車のわだちははつきり切り込んでゐた。向ふに枯草の三角な丘が見えてそこを雲の影がゆっくりはせた。

「おい、どこへ行くんだい。」ホークを持ち首に黒いハンケチを結び付けた一人の立派な男が道の左手の小さな家の前に立つて署長に叫んだ。

「椎蕈山へ行きますよ。」署長は落ちついて答へた。

「椎蕈山こつちぢやない。すっかりみちをまちがつたな。」青年が怒つたやうに含み声で云つた。

「さうですか。こゝからそつちの方へ出るみちはないでせうか。」

「ないね、戻るより仕方ないよ。」

「さうですか。では戻りませう。」もう喧嘩けんくわをしたらとても勝てない。一たまりもないと思つたから署長は大急ぎで一つおじぎをして戻り出した。もう大ていゝだらうと思つてうしろをちよつと振り返つて見たらその若者はみちのまん中に傲然がうぜんと立つてまるでにらみ殺すやうにこつちを見てゐた。そのそばには心配さうな身ぶりをした若い女がより添

つてゐたのだ。署長はまるで足が地につかないやうな気がした。もういまの家のもう少し川上にちゃんと小さな密造所がたつてゐるんだ。毎月三四石づつ出してゐる。大した脱税だ。よし山をまはつて行つても見てやらうと考へた。そしてずっと下つてまがり角を三つ四つまがつてから、非常に警戒しながらふり向いて見るともう向ふは一本の松の木が崖の上につき出てゐるばかりすつかりあの男も家も見えなくなつてゐた。さあいまだと税務署長は考へて一とびにみちから横の草の崖に飛びあがつた。それからめちやくちやにその丘をのぼつた。丘の頂上には小さな三角標があつてそこから頂がずうつと向ふのあの三角な丘までつゞいてゐた。税務署長は汗を拭くひまもなく息をやすめるひまもなくそのきらきらする枯草をこいでそつちの方へ進んだ。どこかで蜂か何かぶうぶう鳴り風はかれ草や松やにのいゝ匂を運んで来た。

ちよつとふりかへつて見るとユグチュユモトの村は平和にきれいに横たはりそのずうつと向ふには河が銀の帯になつて流れその岸にはハーナムキヤの町の赤い煙突も見えた。

署長はちよつとの間濁密をさがすなんてことをいやになつてしまつた、けれどもまた気を取り直してあの三角山の方へつゝじに足をとられたりしながら急いだ。実にあのペイントを塗つた顔から黒い汗がぼとぼとに落ちてシャツを黄いろに染めたのだ。ところが三角

山の上まで来ると思はず署長は息を殺した。すぐ下の谷間にちよつと見ると椎^{しひたけ} 葦^{あし} 乾燥場
 のやうな形の可成^{かなり}大きな小屋がたつて煙突もあつたのだ。そして殊にあやしいことは小屋
 がきつぱりうしろの崖にくつついて建ててあつておまけにその崖が柔らかな岩をわざと切
 り崩したものらしかった。たしかにその小屋の奥手から岩を切つてこさへた室^{へや}があつて大
 ていの仕事はそこでやつてゐるらしく思はれた。これはもう余程の大きさだ。小さな酒屋
 ぐらゐのことはある、たしかにさつきの語^{ことば}のとほり会社にちがひない、いったい誰々の仕
 事だらう、どうもあの村会議員はあやしい、巡査を借りてやつて来て村の方とこつちと一
 ぺんに手を入れないと証拠があがらない、誰か来るかも知れない今日一日見てゐようと税
 務署長は類^{ほまづゑ}杖^{ぼう}をついて見てゐた。するとまるで注文通り小屋の中からさつきの若い男が
 ぼろつと出て来た。それから手を大きく振つたやうに見えた、と思ふと、おゝい、サキチ、
 と叫ぶ声が聞えて来た。見ると荷馬車が一台おいてある。その横から膝^{ひざ}の曲つた男が出て
 来て二人一緒に小屋へ入つた。さあ大変だと署長が思つてゐたら間もなく二人は大きな二
 斗樽^{だる}を両方から持つて出て来た。そしてどっこいといふ風に荷馬車にのつけてあたりをじ
 つと見まはした。馬が黒くてかてか光つてゐたし谷はごうと流れてしづかなもんだつた、
 署長はもう興奮して頭をやけに振つた。二人はまた小屋へ入つた。そして又腰をかぐめて

樽を持つて来た。と思つたらすぐあとからまた一人出て来た。そして荷馬車の上に立つて川下の方を見てゐる。二人はまた中へ入つた、そしてまた樽を持つて出て来たもんだ、（さあ、これでもう六斗になるまさかこれつきりだらう、これつきりにしても月六石になる大した脱税だ）と署長は考へた。ところがまた出て来た。そしてまた入つてまた出て来た。もう一石だ月十石だと署長はぐるぐるしてしまつた。ところが又入つたのだ。こんどは月十二石だ、それからこんどは十四石十六石十八石、二十石とそこまで署長が夢のやうに計算したときは荷馬車の上はもう樽たるでぎつしりだつた。すると三人がそれへ小屋の横から松の生枝をのせたりかぶせたりし出した。

見る間にすっかり縛られて車が青くなり樽が見えなくなつてもう誰たれが見ても山から松枝をテレピン工場へでも運ぶとしか見えなくなつた。荷馬車がうごき出した。馬がじつさい蹄ひづめをけるやうにし、よほど重さうに見えた。するとさっきの若い男は荷馬車のあとへついた。それから十間ばかり行く間一番おしまひに小屋から出た男は腕を組んで立つて待つてゐたが俄にはかに歩き出してやつぱりついて行つた。（実に巧妙だ。一体こんなことをいつからやつてゐたらう。さあもうあの小屋に誰も居ない、今のうちにすっかりしらべてしまはう、証拠書類もきつとある。）税務署長は風のやうに三角山のでっぺんから小屋をめがけ

てかけおりた。ところが小屋の入口はちゃんと洋風の錠が下りてゐたのだ。(きあもういよいよ誰も居ない。あいつが村まで行つて帰るまでどうしても二時間はかゝる。どこからか入らなけあならない。) 税務署長は狐のやうにうろろ小屋のまはりをめぐつた。すると一とこ窓が一分ばかりあいてゐた。署長はそこへ爪を入れて押し上げて見たらカラツと硝子は上にのぼつた。もう有頂天になつて中へ飛び込んで見るとくらくて急には何も見えなかつたががらんとした何もない室だつた。煙突の出てるのは次の室らしかつた。急いでそつちへかけて行つて見たらあつたあつたもう径二米ほどの大きな鉄釜がちゃんと煉瓦で組んで据ゑつけられてゐる。署長は眼をこすつてよく室の中を見まはした。隅の隅のところにあセチレン燈が一つあつた。マツチも添へてあつた。すばやくそれをおろしてみたらたつたいま使つたらしくまだあつた。栓をねぢつて瓦斯を吹き出させ火をつけたら室の中は俄かに明るくなつた。署長はまるで突貫する兵隊のやうな勢でその奥の室へ入つた。そこは白い凝灰岩をきり開いた室でたしか四十坪はあると署長は見てとつた。奥の方には二十石入の酒樽が十五本ばかりずらつとならび横には麴室らしい別の室さへあつたのだ。おまけにビュレットも純粹培養の乳酸菌もピペットも何から何まで実に整然とそろつてゐたのだ。(あゝもうだめだ、おれの講演を手を叩いて笑つたやつはみんな同

類なのだ。あの村半分以上引つ括らなければならぬ。もうとても大変だ。署長はあぶなく倒れさうになった。その時だ、何か黄いろなやうなものがさつとうしろの方で光った。

見ると小屋の入口の扉しとがあいて二人の黒い人かげがこつちへ入つて来てゐるではないか。税務署長はちよつと鹿踊ししをどりのやうな足つきをしたがとつきにふつとアセチレンの火を消した。そしてそろそろとあの十五本の暗い酒だるのかげの方へ走つた。足音と語ことばががんがんと反響してやつて来た。「いぬだいいぬだ。」「かくれてるぞかくれてるぞ。」「ふんじばつちまへ。」「おい、気を付けろ、ピストルぐらゐ持つてるぞ。」ズドンと一発やりたいなど署長は思った。とたん、アセチレンの火が向ふでとまった。青じろいやな焰ほのほをあげながらその火は注意深くこつちの方へやつて来た。「酒だるのうしろだぞ」二人は這はふやうにそろそろとやつて来た。

署長はくるくると樽の間をすりまはつた。

そしたらたうとう桶をけと桶の間のあんまりせまい処へはさまつてのくも引くもできなくなつてしまつた。

アセチレンの火はすぐ横から足もとへやつて来た。と思ふと黒い太い手がやつて来ていきなり署長のくびをつかまへた。ガアンと頭が鳴つた。署長は自分が酒桶の前の広場へ蟹かに

のやうになつて倒れてゐるのを見た。まるで力もなにもなかった。アセチレン燈もまだ持つてゐる。

「立て、こん畜生太いやつだ。炭焼がまの中へ入れちまふから、さう思へ。」

（炭焼がまの中に入れられたらおれの煙は木のけむりといつしよに山に立つ。あんまり情ない。）署長は青ざめながら考へた。

「誰だ、きさん、収税だらう。」

「いゝや。」署長は氣の毒なやうな返事をした。

「とにかく引つ括れ。」一人が顎でさし凶した。一人はアセチレンをそこへ置いてまるで風のやうにうごいて綱を持つて来た。署長はくるくるにしばらくられてしまった。

「おい、おれが番してるから早く社長と鑑査役に知らせて来い。」

「おゝ。」一人は又すばやくかけて出て行つた。

「おい、云はないかこん畜生、貴さん収税だらう。」

「さうでない。」

「収税でなくて何しに入るんだ。」署長はやうやく氣を取り直した。

「おいらトケイの乾物商だよ。」

「トケイの乾物商が何しにこんなところへ来るんだ。」

「椎葦しひたけ買ひに来たよ。」

「椎葦。」

「あゝこゝで椎葦つくつてると思つたから見てみたんだ。名刺もちやんと組合の方へ置いてある。」

「正直な椎葦商が何しに錠前のかかった家の窓からぐり込むんだ。」

「椎葦小屋の中へはひつたつていゝと思つたんだ。外で待つてゐても厭あきたからついひつて見たんだよ。」

「うん。さう云やさうだなあ。」こゝだと署長は思つた。みんなの来ないうちに早く遁にげないともうほんたうに殺されてしまふ。もう一生けん命だと考へた。

「おい、いゝ加減にして繩なはをといて呉れよ。椎葦はいくらでも高く買ふからさ。おれだつてトケイにあ妻も子供もあるんだ。こゝらへ来て、こんな目にあつちや叶かなはねえ。どうか繩をといて呉れよ。」

「うん、まあいままみんな来るから少し待てよ。よく聞いてから社長や重役の方へ申しあげれあよかつたなあ。」

「だからさ、遁にがして呉れよ。おれお前にあとでトケイへ帰ったら百円送るからさ。」
 「まあ少し待てよ。」あゝもう少し待ったら、どんなことになるかわからない。署長はぐるぐるしてまた倒れさうになった。

ところがもういけなかったのだ。入口の方がどやどやして実に六人ばかりの黒い影が走り込んで来た。(もう地獄だ、これつきりだ。)署長は思った。今まで番をしてゐた男は立つてそれを迎へた。ぐるつとみんなが署長を囲んだ。

「こいつはトケイの椎しひたけ葦商人ださうです。椎葦を買はうと思つて来たんださうです。」
 「うん。さつき組合へうさんなやつが名刺を置いて行つたさうだがこいつだらう。」りんとした声が云つた。署長は聞きおぼえのある声だと思つて顔をあげたらじつさいぎくりとしてしまった。それは名誉村長だった。しばらくしんとした。

「どうだ。放してやるか。」また一人が云つた。署長は横目でそつちを見上げた。あの村会議員なのだ。

「いや、よく調べないといけません。念に念を入れないとあとでとんだことになります。」
 署長はまたちらつとそつちを見た。それはあの講演の時青くなつた小学校長だった。すなはちわれらの樽たるコ先生ではないか。

「いゝえ、こいつはさつき一ぺん私が番所から追ひ帰したのです。どうもあやしいと思ひましたからとがめましたら椎葦山はこつちかと云ふんです。こつちぢやない帰れ帰れつて云ひましたらさうですかこころからまはるみちはないかとまた云ひやがるんです。ないない。帰れと云ひましたら仕方なく戻つて行きました。そいつをいつの間にどこをまはつてこゝへ入つたかもうこいつはきつと税務署のまはしものです」

「うん。さう云へばどうもおれにもつらに見おぼえがある。表へ引っぱり出してみる。てめへは行つて番所に居ろ。」社長の名誉村長が云つた。

「立てこの野郎」署長はえり首をつかまへられて猫のやうに引っぱり出された。おもてへ出て見ると日光は実に暖かくほかほか餡色あめに照つてゐた。(おれが炭焼がまに入れられて炭化されてもお日さまはやつぱりこんなにきれいに照つてゐるんだなあ。)署長はぽつと夢のやうに考へた。

「何だこいつは税務署長ぢやないか。」名誉村長はびっくりしたやうに叫んだ。それからみんなはにゆうと遁げるやうなかたちになつた。署長はもうすっかり決心してすつくと立ちあがつた。

「いかにもおれは税務署長だ。きさまらはよくも国家の法律を犯してこんな大それたこと

をしたな。おれは早くからにらんでゐたのだ。もうすっかり証拠があがつてゐる。おれのことなどは潰すなり灼くなり勝手にしろ。もう準備はちゃんとできてゐる。きさまたちは密造罪と職務執行妨害罪と殺人罪で一人残らず検挙されるからさう思へ。」

社長も鑑査役も実に青くなつてしまつた。しばらくみんなしいんとした。

こゝだと署長が考へた。

「さあ、おれを殺すなら殺せ、官吏が公務のために倒れることはもう当然だ。」署長は大へんいゝ氣持がした。といきなりうしろから一つがあんとやられた。又かと思ひながら署長が倒れたらみんな一ぺんに殺氣立つた。

「木へ吊るせ吊るせ。なあに証拠だなんてまだ拳がつてる筈はない。こいつ一人片付ければもう大丈夫だ。樺花の炭釜に入れちまへ。」たちまち署長は松の木へつるしあげられてしまつた。村會議員が出て云つた。

「この野郎、ひとの家でご馳走になつたのも忘れてづうづうしい野郎だ。ゆぶしをかけるか。」

「野蛮なことをするな。」署長が吊られて苦しがつてばたばたしながら云つた。

「とにかく善後策を講じようぢやないか。まあ中で相談するでしょう。」村長が云つた。

みんなは中へはひつた。署長は木の上で気が遠くなつてしまった。

五、署長のかん禁

しばらくたつて署長は自分があの奥の室へやの中に入れられてゐるのを気がついた。頭には冷たい巾ぎれがのせてあつたし毛布もかけてあつた。いちばんあとから小屋を出た男が度つつましく番をしながら看病してゐた。おもてではがやがやみんなが談はなしてゐた。何でも善後策を協議してゐるか酒盛りをやつてゐるらしかった。署長がからだをうごかしたらすぐその若者が近くへ寄つて模様を見た。それから戸をあけてそして一つ戸をあけて外の大きな室に出て行つた。と思ふと名誉村長が入つて来た。茶いろの洋服を着てゐた。(そして見るとおれは二日か三日寝てゐたんだな。)署長は考へた。名誉村長は座つて恭しく礼をして云つた。

「署長さん。先日はどうも飛んだ乱暴をいたしました。」

実は前後の見境ひもなくあんなことをいたしましたしてお申し訳けません。実は私どもの方でもあなたの方のお手入があんまり厳しいためつい会社組織にしてこんなことまで

いたしましたやうな訳で誠に面目次第もございません。就きましていかゞでございませう。私どもの会社ももうかつきり今日ぎり解散いたしましたして酒は全部私の名義でつくつたとして税金も納めます。あなたはお宅まで自働車でお送りいたしますがこの度限り特にご内密にねがひませんでせうか。」

署長はもう勝つたと思つた。

「いやお語ごしごばで痛み入ります。私も職務上いろいろいたしましたがお立場はよくわかつて居ります。しかしどうも事こゝに至れば到底内密といふことはでき兼ねる次第です。もう談はなしがすつかりひろがつて居りますからどうしても二三人の犠牲者はいたし方ありますまい。尤も私もつとに関するさまさまのことはこれは決して公にいたしません。まあ罰金だけ納めて下さつてそれでいゝやうな訳です。」

「それがそのどうも私どもはじめ名前を出したくないので。」

この時だ、表ひはかが俄にはかにやかましくなつて烈はげしい叫声や組討ちの音が起つた。まるでもう嵐のやうだつた。

「署長署長」誰たれかが叫んだ。署長はぼつと立ちあがつた。

「おゝ、こゝに居るぞよくやつたよくやつた。シラトリ、こゝに居るぞ。」

すぐ二三人が室の戸をけやぶつて入つて来た。

「署長、ご健勝で。もうみんな捕縛しました。」とシラトリ属が泣いてかけて来た。

「よくわかつたなあ、警察の方もたのんだか。」

「え、総動員です。二十人捕縛してあります。この方は。」

「名誉村長だ。けれども仕方ない繩をかけ申せ。」署長はわくわくして云つた。

「署長ご健勝で。」署員たちが向ふ鉢巻をしたり棍棒をもったりしてかけ寄つた。署

長は痛いからだを室から出た。

「樽にみんな封印しろ。証拠品は小さな器具だけ、集めろ。その乳酸菌の培養も。うん。

よろしい。いやどうもご苦勞をねがひました。」署長は巡查部長に挨拶した。

「お変りなくて結構です。いや本署でも大へん心配いたしました。おい。みんな外へ引つ

ぱれ。」

そしてもうぞろぞろみんなはイーハトヴ密造会社の工場を出たのだ。五分のちこの変な行列があつた番所の少し向ふを通つてゐた。

署長は名誉村長とならんで歩いてゐた。

「今日は何日だ。」署長はふつとうしろを向いてシラトリ属にきいた。

「五日です。」

「あゝもうあの日から四日たつてゐるなあ。ちよつとの間に木の芽が大きくなった。」

署長はそらを見あげた。春らしいしめった白い雲が丘の山からぼおつと出てくるもじのにほひが風にふうつと漂つて来た。

「あゝいゝ匂にほひだな。」署長が云つた。

「いゝ匂ですな。」名誉村長が云つた。

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第十一卷」筑摩書房

1979（昭和54）年11月15日初版第1刷発行

※底本本文の編集方針に合わせて、ルビの拗音、促音、「喧嘩《けんくわ》」、「煉瓦《れんぐわ》」を小書きしました。

入力：田代信行

校正：斉藤知子

2005年1月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

税務署長の冒険

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>